



イギリスだより

立教英国学院の

子どもたち

小野 英子

イギリス南部の豊かな田園風景の中に立教英国学院はある。ロンドンからわずか一時間の距離ではあるが、その大都市の影はすっかり消え、緑の大地が広がる。広い牧草地には羊や牛が草を食み、或いは寝そべっている。学校の敷地内には野うさぎ（まさにビーター・ラビットの仲間のような）はもとより、鹿までもが時折顔を出す。このようなのかな環境の中で三五〇名余りの子どもたちが勉学のみならず、寝食を共にしながら生活している。小学校五年生から高校三年生までのこの子どもたちの親のほとんどは海外で働く企

業駐在員、外交官であり、その任地はヨーロッパを始めアフリカ、中近東まで様々で、海外進出甚しい今の日本の経済、社会状況を映し出している。

この学校を、そして子どもたちを紹介するのにまず何から書き始めたらいのか、大いに迷うところであるが、徐々に筆を進ませていただく。

○ 一日

朝七時、カランカランという、日直の先生の鳴らす鐘の音で生徒達は目を覚ます。十五分を着替え、洗面、それからよほどの雨降りでない限り全校生徒で庭に集合してラジオ体操をする。ここは地理的に緯度の高い場所にあるので夏は朝四時頃から夜は十時位まで明かるく、逆に冬は夕方四時すぎには真暗になる。従って冬のこのラジオ体操をする時間はまだまだ薄暗く、寒い。それでも毎日同じように続けられる。ラジオ体操の後、朝食となる。

この学校を紹介するとき、その特色の一つとして「食事」が挙げられる。ニューホールと呼ばれる食堂に全員

が一堂に会して三度の食事を摂るのであるが、それは先ず食前の祈りから始まる。一つのテーブルには二十人ずつ座るが席は指定され、そこにテーブルマスターの先生がつき料理を配る。いろいろな学年の生徒が入り混ざって並び、毎日一つずつ一定方向にずれていく。それによってより多くの生徒とふれ合うことができる。低学年、或いは新入生の隣りには、面倒見が良いと見込まれた上級生がくるように配慮されている。そしてその上級生達には、下級生にこの学校の食事の作法を日々の食事の中で教えていく。食事作法とは、第二代校長 Miss Foss が「女王陛下の前へ出て食事をするという場合でも決して恥かしくないもの」として教えてくださったもので、十数年来続いている。確かに長くいる生徒ほど、ナイフと

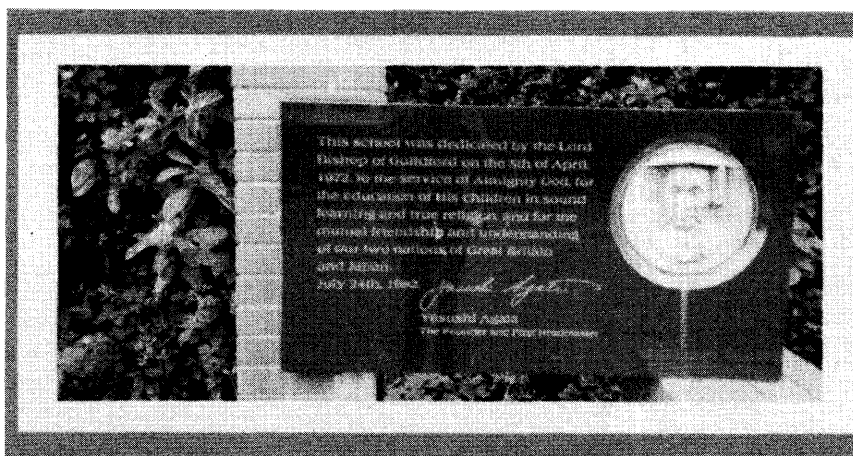
フォークの使い方は巧みである。加えて、多人数が一斉になるべく速やかに食べられるようにと長い年月の中で編み出されたのであろう種々のこまごまとしたこと、これらが相まって三五〇名の食事が極めてスムーズに進むのである。まわりくどく書いてしまったが、これぞ百聞は一見に如かずといった感がある。

コーンフレックスから始まるイングリッシュ・ブレックファーストに準じた朝食の後は礼拝となる。立教英国学院は、聖公会系の学校である為、礼拝も大事な日課の一つとなっている。午前中の授業は、十五分のおやつ時間を挟んで三時間、午後も同様に三時間の授業がある。カリキュラムは日本の学校のものほとんど変わらないが、英人による英語の授業も週数時間入る。特に高校生は、GCSE.という英国の大学に入る際に必要な資格試験の為の授業を受けることができる。これらは物理、数学他、いろいろな科目に分かれており各々の試験をパスするときに、A、B、…のようにランク付けされる。高いランクでパスした科目が多いほどレベルの高い

大学へ入れるというようなしくみになっているそうである。日本の大学で帰国子女を受け入れる際に、この資格が認められる場合もある。概して彼らの英語を学ぶ環境は恵まれている。

放課後は、六時の夕食までクラブ活動となる。夕食後はホームルーム、中・高生は一時間ないし二時間の授業、その後自習。小学生は、九時三〇分には寝る。各々の学年によって就寝時間は決められている。

なんと時間に縛られた生活なのであるかと思われる方がいるかもしれない。しかし、限られた時間をいかに有効に使えるか、使えるような人間になるか、が、我々の期するところなのである。現に生徒の中には、毎日と同じで変化がなくつまらない、何もすることがない、と口にする者もいる。果たしてそうであろうか。自分が熱中できること、何か打ちこめることを見つけれないでいるこれらの子どもたち、彼ら自身が悪いわけではないが、無駄にしまっているものが多いのは確かである。勿論、私たちは彼らに解決の糸口を与えてやらねば



As the words of the founder, and the first headmaster, Mr. Yasushi Agata, will tell this school was Dedicated by the Lord Bishop of Guildford on the 5th of April, 1972 to the Service of Almighty God, for the education of his Children in sound learning and true religion, and for the mutual friendship and understanding of our two Nations of Great Britain and Japan.

ならないのではあるが。

教師は二十四時間体制の中、四六時中生徒と共に過すが、それによって生徒との関係も緊密になってくる。

その為であろうが、我が校の生徒は教師に対する依存度が大きいようである。確かに親元を離れて暮らす彼らにとって、教師は頼れる存在ではあるが、一線を画するのことも大事なこととなってくる。

○ 一週間

金、土、日曜日は普段とは違った過ごし方ができる。

金曜の午後はフライデースポーツといって全校でいろいろな種目に分かれて運動する。乗馬は其中でも人気のある種目だが、近くの馬場まで行き、練習する。テニス、バスケットボール、サッカー、バレーボール等は校内で、バトミントン、ハンドボール、水泳等は近くの市の体育館やプールまで、バスで出かけていき、体を動かす。私は、ネットボールというイギリス独自のスポーツを生徒と共にやっているが、やっとルールを覚えたところ

ろである。バスケットボールに似てはいるが、七人制で、ドリブルが使えず、パスだけでつないでいてシュートするといった具合の女子のみのスポーツでなかなかややこしい。クリケットもそうだが、イギリスには独自のスポーツがままあるので面白い。

土曜の午後は自由となつて息抜き。そして夕食には、週に1度の日本食が出る。日本食といえども材料の関係でメニューにも限りがあるが、箸を使つての食事である。日曜日は八時起床、十時からは主日礼拝だが、後は自由、まさに自分たちの時間を持つことができる。一週間を通じて、生徒は語学及び楽器の個人レッスンを受けることができる。語学は英語、独語、仏語。楽器はピアノ、バイオリン、チェロ、ギター、木・金管と多岐にわたる。かなり多くの生徒が何らかのレッスンをとっており、特に音楽関係は、昨年クイーンエリザベスホールという大きな会場を借りてコンサートを開いたりと盛んである。

○ 地域とのつながり

立教英国学院は、Rudgwick村の一画にある。生徒達の衣類の洗濯、ベッドメイク等をしてくれるクリーニングレディース、キッチンの手伝いをしてくれる人々は、皆、Rudgwick村に住んでいる。彼らに負うところは非常に大きく、生徒には彼らへの感謝の念を失しないよう心がけさせている。そしてこちらからの働きかけとして、月に一回クラス毎にこの村の教会の日曜礼拝に行ったり、老人クラブ主催のバザーがあれば参加する。Rudgwick村だけでなく更に広い地域とも交わりを持つ。近隣の学校との対外試合、フェイト（バザーのようなもの。fete）への参加、ガールガイズ（ガールスカウトのこと）への参加などが挙げられるが特にフェイトでは、剣道、茶道、書道等を披露して日本文化を紹介する。このような交わりを持つことは学校としての立場の上でも大切なことであるが、それと同時にこれらに参加した子どもたち自身が貴重な体験を得られるという点も見逃せない。子どもたちの自覚の有無はさてお

ても。

○ 小学生たち

小学校五年とはいえ、まだ十、十一歳である。親元を離れ、さぞ寂しきやと思えばそうでもなく、わいわいと元氣よくやっている。もつとも、時折妙に甘えてくる子どもがいるときには、やはり……と思うのだが。イギリスでは子どもを寄宿学校に入れることが多いようだが、日本ではあまり考えられない。現在、五年生五人（男子四、女子一）六年生九人（男子八、女子一）合わせて十四人、女の子が極端に少ないが、彼女達はそれなりに頑張つてやっている。彼らの両親のほとんどはイギリス在住である。この学校へ来る前は現地の学校へ一、二年通つてきた者もあり、英語の話せる子どもが多い。但し、読み書きはどうかというと、それほどでもない。が、私は彼らの前では極力、英語を使わないようにしている。使うや否や、彼らの厳しい評価が下されるからである。十四名の小学生の内、一人は日本の小学校へ通つた

ことがない。アメリカ、それからイギリスと、ずっと現地の学校、週一回、日本語補習校へ通っていた。あとは多分日本の通信教育を受けたのであろう。今の段階では、学習面、生活面共に、日本の学校へ行っていないのが壁になっているというようことはない。子どもが現地に通っている場合、家庭における学習がポイントとなってくる。去年の小学六年生に父親がイギリス人である子どもがいたが、彼は日本語、英語共、話すことはもちろん、読み書きもきちんときた。立教に来るまでは、ずっと現地の学校である。口で言うのはたやすいが、これだけきちんときるようにするには、かなりの困難がつきまとう。母親の努力が推し量られるところである。

語彙が豊富に取り入れられるはずである時期に、英語の環境の中で学んだ子どもたちは、日本語の語彙力という点で多少不利となる。

英語では、こういうのだが、それを説明する日本語が見つからない、というようなこともある。概念はわかる

のだが、それを英語で吸収しているのである。彼らはこれから少しずつ、言葉を得ていくしかない。

学校における生活を最も楽しんでいるのは小学生であろう。文句の多くなる中、高校生とは違って、自分たちで、楽しむ術を知っている。自分たちで何かしら遊びを見つける。事実、豊かな自然の中には、四季を通じて、種々のものが潜んでいる。彼らは、上級生とも友達である。体が倍以上あっても、先輩とは呼ばずに○○君なのである。また、上級生もこのなまいきな(?)小学生と遊んであげるのである。

小学生のみならず、この学校の生徒からは日本の学校の子どもたちと違うという印象は与えられない。私が、この学校へ来る前は、海外で学ぶ子どもたちだから、何か違うのではないかと予想していたのだが、それははじかれた。なぜ、こうも、と思うくらい、いわゆる日本的であると、私の目には映ったのである。

一年を通じていろいろな行事があるが、今年度は(立

教英国学院は、四月から三月までの三学期制)五月に球技大会、学校校内ではあるが、ブルーベルという花が咲き乱れる頃、絨毯のように咲きつめているのを、全校で見に行くブルーベル見学、それから、つい先日、全校でウィンブルドンまでテニスの試合を見に行った。二時間、延々と並んで待った挙句、やっとナブラチロワやマッケンローの試合を直に見る機会を得た。小学生は、テニスの試合はどこへ行ったのやら、アイスクリームを食べることに専念していた。

(立教英国学院)